



Title	インタビューもいやだし、自分を書くのもいや
Author(s)	齊藤, 如穂
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集1 第15回臨床哲学フォーラム「社会の臨床、そのメチエとエチュード」
 テーマ「シリーズ第1回 臨床を書く、そのくるしみ」

インタビューもいやだし、自分を書くのもいや

齊藤 如穂

1. はじめに

わたしの自己紹介をさせていただきます。わたしは、看護学分野にて学士と修士を取得しました。その後は、総合病院で助産師として6年、看護大学で助手として2年勤めました。

そして現在、臨床哲学研究室に所属しています。看護学分野は、看護の営みを明らかにする実践学の一つではありますが、その実践は科学的根拠に基づいていることが求められます。この科学的根拠は、基本的に自然科学に密接に関連していて、研究手法の厳密さが研究の質を担保することになります。そのため、看護学では量的・質的問わず、研究手法を一通り学ぶことができた反面、研究手法に研究テーマや内容が縛られてしまう場面も多々ありました。また、助産師として働いていた時は、助産の“専門家”としての視点や医療の枠組みの中で妊産褥婦さんたちや赤ちゃんたちと関わることを求められていましたが、その枠組み自体に限界を感じました。そのような中で、博士後期課程への進学先を悩んでいた時に、現在の指導教員である小西真理子先生の著書に出会い、臨床哲学であれば研究を通して生身の“声”を聞くことができるのではないかと思いました。こういった理由から、現在臨床哲学に所属しております。しかし、看護学分野から哲学分野へ移行したばかりの1年目は、研究手法も今まで習ってきたものと全く異なり、普段ゼミなどで使用される「ことば」でさえも、慣れない用語が飛び交い、まるで外国にいるような気分になりました。そのような哲学初心者のわたしは、臨床哲学研究室に所属しているといっても、哲学も倫理学もよくわかっておりません。臨床哲学はもっとよくわかりません。このように何もわかっていないわたしが、何を話せるのだろうかと悩みました。本日のフォーラム発表に臨むにあたり、原稿を書きましたがとてもくるしみました。「臨床を書く、そのくるしみ」を書くことにくるしみました。しかし、原稿を書くことを通じて、わたしの書くことのくるしみが、少し整理でき言語化できた部分もありましたので話したいと思います。

これからわたしが話します「書くことのくるしみ」は、学問レベルのくるしみではなく、ましてや助産師、博士課程におけるくるしみでもありません。何者でもない、生身のわたしの、齊藤如穂が有するくるしみであることを先に述べておきます。ただ、わたしは文章作成能力がまだ未熟であり、後述するのですが自分の体験を言葉にする難しさも抱えております。ですので、石原吉郎とプリーモ＝レーヴィの著作から、文章をお借りすることといたします。なぜなら、二人の言葉が、わたしにとっての「書くことのくるしみ」を、わたし以上に適切に表現していると思われるからです。この1年間で学んだことですが、どうやら臨床哲学研究室は自分の考えを言葉にしても大

丈夫な研究室であるようです。今回のフォーラムにあたり、ある先生から「好きに暴れて大丈夫」という許可をもらいましたので、好きに喋ろうと思います。みなさんにわたしの話が伝わるよう、可能な限り努力しましたが、理解しにくい部分もあるかと思っています。その部分は、フォーラムが終了した後に、みなさまとお話しできるきっかけになれば幸いです。

2. 研究とわたし

わたしは、両親間葛藤、いわゆる夫婦喧嘩が激しいなかで育った子どもに関心をもっています。両親間葛藤は、主に心理学、とりわけ発達精神病理学の分野で研究が進められてきました。発達精神病理学とは、「なぜ標準的な精神の発達から逸脱するのか、その起源とプロセスを理解し説明しようとする学問」であり、メンタルヘルスに関して、予防と治療の向上に寄与することを目指しています。そのため、心理学分野で両親間葛藤を研究する場合、子どものより健全な精神発達への寄与、が研究意義として求められます。

わたしは、このような精神発達の観点ではなく、両親間葛藤のなかで育った子どもの「生」のあり方に関心があります。なぜなら、わたし自身が両親間葛藤のなかで育った子どもだからです。両親は、わたしが高校1年生のときに離婚しました。両親は顔を合わせると、常に喧嘩をしていました。両親が喧嘩をするあの日々は何であったのか、わたしは徹底的にこのことを考え抜きたいと思いました。そのため、わたしは、心理学でも馴染み深い看護学でもなく、臨床哲学研究室で研究することを選択しました。そして、ここからわたしの「書くことのくらしみ」が始まりました。

3. インタビューもいや

わたしは、研究方法としてインタビュー調査をしようと考えています。両親間葛藤の研究は、主に量的研究が多く、インタビュー調査が少ないです¹。そのため、両親間葛藤のなかで育った子どもの「生」を書くには、生の声を聞く必要があると考えました。

それはそうとして、研究は先行研究を読まなければ始まりません。臨床哲学研究室に所属する前は、仕事をしながら先行研究を読んでいました。そのときは、修士学時代と変わらず、冷静に先行研究を読むことができました。しかし、現在は先行研究を冷静に読むことが難しくなりました。先行研究を読んでいても、文章が頭のなかに入らず、下手をすると涙が止まらなくなることもありました。わたしにとって先行研究に書かれた文章・言葉は、どこか違うものでした。それは、研究の方法論が「間違っている」とか、「正しくない」というわけではありません。そうではなく、両親間葛藤のなかで育った子どもの心理・行動を表面上しか捉えずに解釈しているように思われました。例えば、父親から届いた手紙を、母親が破ってほしいと思っていると察した

¹ 発達精神病理学分野では量的・質的問わず、複数の手法を用いた研究が推奨されている。しかし、日本では主に欧米で開発された理論に基づいて両親間葛藤が子どもに影響を与える媒介過程を調べるための日本語版尺度開発がなされている。そのため、研究手法は統計を用いた量的研究がほとんどである。

ため、子どもが破いたという一連の行為について、研究では同居親への忠誠心という言葉に回収されます。このことは、両親間葛藤の先行研究に照らし合わせると正しいことです。ですが、子どもが抱く父親からの手紙を破り捨ててまでも守りたいと思う家族の安寧への気持ちなどは、全く浮かび上がってきません。そうであるにもかかわらず、まるで研究結果が「事実」の全てのように書かれていることに、わたしは愕然としました。

それはわたしも、自身の研究でインタビュー相手の意図や解釈と異なる内容を書いてしまうのではないかと、という恐れに変わりました。インタビューの語りの中から、どの言葉を研究として残すか取捨選択する段階から、研究手法に則っていたとしても研究者の意図が入り込みます。つまり、他者の語りに研究をとおして研究者である“わたし”が入り込むことについて危惧しています。どのような研究の文脈で、どのような語りが、研究者のどのような言葉と共に用いられるのか。研究という土俵で、「事実」とちがう言葉を他者の体験にあてがってしまわないか、本当に恐いのです。そして、きっとそうなるだろうと、わたしは確信をしています。わたしにとって、他者とはどう足掻いても理解できない存在です。ですから、他者が他者である限り、わたしは他者を理解できず他者の体験を書くこともできないと思っています。つまり、他者の言葉を他者の言葉のままに、わたしが記述することは不可能なのです。インタビューの語りは、協力者に内容の確認をとります。研究協力者の同意がなければ、語りを研究結果として公表することはありません。そうであったとしても、研究協力者はその個人の人生を凝縮させ、研究に何かしらの期待を込めて語ってくれていることもあります。その期待は、研究協力者のそれまでの「生」が賭けられていることでもあると思います。加えて、私の研究は人の繊細な部分に入り込む研究だとも自覚しています。だからこそ、その「生」を賭けて、期待を込めて語ってくれた内容について、事実を書くことが不可能にもかかわらず、それを研究の中で事実のように書くことに迷いと抵抗を覚えます。このような理由から、わたしは、「インタビューがいや」です。

加えてもうひとつ、わたしが「インタビューをいや」な理由があります。それは、研究を通じて、他者を「消費」してしまうことです。わたしは、人文学研究科の紀要論文（待兼山論叢）にて「面前DVと法的支援」をテーマに執筆しました。その際、法律改正の機になったとして、〇〇県〇〇市の虐待事件と書きました。待兼山論叢の原稿提出が終わってしばらくしたのち、気になっていた本を読んでいたら、〇〇県〇〇市の〇〇〇〇ちゃんと、虐待を受けて亡くなった子どものフルネームが書かれていました。子どもの名前を見たときに、わたしは「名前を出すこともなく、自分の論文の一部として“消費”した」のだと、自身に怒りを感じました。〇〇県〇〇市の虐待事例と書くことは、子どもの名前よりも虐待を前面に押し出し、子どもの「生」を虐待によって上塗りして消し去ってしまう行為であると思います。また、わたしが他者を“消費”することについて何よりも抵抗感があることは、自分がそれを無自覚に行なってしまうことです。少なくとも、待兼山論叢を書いていた時のわたしは、子どもの生や死を無自覚に消費していたと思います。今回のフォーラムでは、この原稿に名前を記載するかどうかは最後まで悩みました。なぜなら結局のところ、わたしはフォーラム

のために、みなさんに自分がインタビューをいやな理由を伝えるために、「消費」しているように思えるからです。ですから、原稿には名前を記載しないことを選択しました。しかし、名前に全く触れないことは、存在自体を消し去ってしまう側面もあると思います。唐突に思えるかもしれませんが、石原吉郎の言葉を引用します。

死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ。²

石原吉郎は、シベリアの強制収容所においてあまりにも多い死者の数によって、ひとりの死が集団の死に置き換わる体験をしました。そのため、石原は彼のエッセーにおいて「大量殺戮のなかのひとりの死者を掘り起こすこと」³について強調しています。名前というのは、同姓同名の人がいるといえども、そのひと固有のものです。そのひとがそのひととして生きて／死んだことを確認する手段となるのです。このことについて、石原は次のように述べています。

そしてその確認の手段として、最後に彼に残されたものは、彼の名前だけという事実は、背すじが寒くなるような承認である。にもかかわらず、それが、彼に残されたただ一つの証しであると知ったとき、人は祈るような思いで、おのれの名におのれの存在のすべてを賭けるだろう。⁴

ですから、わたしはこの場において名前のみ呼ばせていただきます。そのことに何の意味はないのかもしれませんが、しっかりと声に出し「名」を呼びたいと思います。

加えて、名前を書けば「消費」していないということになるのでしょうか。研究は、虐待や両親間葛藤などのように、ひとつのテーマを決めて論じます。そうすると、テーマにそうために論文に書く言葉は取捨選択されます。それは、インタビュー調査によって聞き取られた言葉も同じです。せっかくの言葉が、研究テーマに沿っているかどうかで、削られてしまうのです。また、研究などの公的文書となると何かしらの意義が求められます。それは、執筆者の興味だけで研究や調査が進めることで、他者に不利益を被らないためにも必要なこととなります。他方、論文に限らないのですが、何かしらの「意義」を主張することは実際に生きた「生」を、何か意味のある別の「生」に置き代えてしまうように、わたしには思われます。例えば、虐待などに関連する文書における「こどもの苦しみを無駄にしない」、「他の事例に活かすため」などの文言になります。石原吉郎は、次のような文章を残しています。

私は広島について、どのような発言をする意志ももたないが、それは、私が広

² 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、1997年、9～10項

³ 石原吉郎『石原吉郎評論集 海を流れる河』同時代社、2000年、14頁

⁴ 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、1997年、9～10項

島を目撃者でないというただ一つの理由からである。しかしそのうえで、あえていわせてもらえるなら、峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによって先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である。それがただ一人の悲惨であることが、つぐないがたい痛みのすべてである。⁵

前述した「こどもの苦しみを無駄にしない」という文言は、実際に子どもが亡くなった虐待事例の報告書に記載されていた内容です。報告書を作成することは、虐待予防や今後の適切な対応のために必要不可欠です。そのために、虐待事例を詳細に振り返ることも重要です。他方、虐待事例の一つとして取り扱うことは、ひとりの子どもの「生」を虐待事例という集団に置き代えてしまう側面もないでしょうか。そして、「無駄にしない」などのような、「生」に対する意味づけは、それがたとえ虐待を予防するという意図であっても、未来の虐待事例を先取りして、実際の子どもの「生」を未来の虐待事例で上塗りしてしまっていないでしょうか。研究や調査をするということは、このようにただひとりの固有の「生」や「死」を、別のものに置き代えて記述する可能性があることだと思われまます。それは、言葉を取り扱うものの不遜であるとする、わたしには思えます。さまざまな意見があるかと思いますが、少なくともわたしは、研究者がそのような立場であると認識して研究に臨むことが望ましいと考えています。

ここまで、わたしがインタビューをいやな理由を述べてきました。わたしは、他者の体験にちがう言葉をあてがってしまうことが、「いや」です。さらに、研究を通じて、他者の固有の「生」を別の生に置き代えてしてしまうことが、「いや」です。

4. 自分を書くのもいや

このような理由からインタビューがいやになり、そもそも両親間葛藤に関する先行研究を読めなくなりました。そのため、わたしは自分の体験を書いてみることにしました。しかし、タイトルのように「自分を書くのもいや」になりました。その理由は、主に2つあります。1つ目は、記憶を思い起こすことの困難さ、2つ目は記憶を書くことの不可能さ、になります。

まず、記憶を思い起こすことの困難さを話したいと思います。自分の体験を書くには、「体験」を思い起こさなければなりません。なにせ、わたしの両親が離婚したのは17年前です。わたしにとって体験を書くということは、過去の体験の「記憶」を書くことになります。どうしても記憶が薄れている箇所もありますし、研究用語でいう「思い出しバイアス」が生じます。何より、体験を思い起こすことは苦痛で、ある種の肉体的痛みを伴う行為になります。このように、体験を書く前段階として「記憶の不確かさ」、そして「記憶を思い起こす苦痛」に向き合わなければいけません。そのため、もう少し「記憶」について考えてみたいと思います。

⁵ 前掲、17項

プリーモ＝レーヴィは、著作『溺れるものと救われるもの』で記憶について次のように述べています。

私たちの心の底に蓄積されている記憶は石の上に刻まれているわけではない。それは年月とともに薄れていく傾向を持つだけでなく、しばしば変形し、異なった外貌を取り入れながら自己増殖する。⁶

加えて、次のようにも述べています。

例えば多くの戦争の生き残りや、それ以外の精神的損傷を伴う複雑な体験を生き延びたものたちは、その記憶を無意識のうちに、漉し器にかける傾向があることが知られている。⁷

このように、ひとはどのような記憶であっても忘れていき、さらに記憶が苦痛である場合には、思い起こすことがより難しくなります。プリーモ＝レーヴィは、「私たちの心を深く傷つけたが、私たちや私たちの周囲に物質的な傷跡、あるいは永遠の欠落を残さなかった出来事に関して、「それを決して忘れない」という時、それは軽率な言い方である。」⁸とも述べており、わたしはこの言葉に大いに賛同します。

さらに、記憶は薄れていくだけでなく、歪んでもいきます。プリーモ＝レーヴィは、記憶の歪みに関して次のように述べています。

アルベルトは帰って来なかった。あれからもう四十年以上の月日が流れた。だが私はもう一度彼の家族を訪ねて、彼らがお互いに助け合いながら作り上げた慰めの「真実」に、私の苦痛な真実を対置する勇氣はない。⁹

ひとは、苦痛な記憶ほど歪め、慰めの記憶を作り上げることがあります。プリーモ＝レーヴィの言うように、あるひとにとっては作り上げた記憶も「真実」です。ここで重要なことは、わたしの記憶もだいぶ薄れ、辛い出来事を別の記憶に塗り替えている可能性が高い、ということです。もしくは、辛い出来事をあえて何でもない出来事だと思い込んでいる可能性もあります。

わたしは、両親の喧嘩が最もひどかった中学校3年間は、あまり記憶がありません。ところどころ記憶はありますが、基本的に世界は「黒く」、記憶がある場面は「黒いなかを人物が動いている」イメージです。そのため、具体的に思い起こすことは難しいです。わたしの過去の家庭環境について少し話しますと、父は無職で借金を抱えてい

⁶ プリーモ＝レーヴィ『救われるものと溺れるもの』竹山博英訳、朝日新聞出版、2000年、17項

⁷ 前掲、27～28項

⁸ 前掲、28項

⁹ 前掲、30項

たため、中学生のときはガスが止まったり、借金取りが家に来たりしました。毎日が未知との遭遇です。生活そのものが不安に満ちていました。そのため、両親が喧嘩する場面でなくても、基本的に世界は「黒く」、記憶が曖昧なのだと思います。そして、両親の離婚後は、普通の生活を送ることを目指してがむしゃらだったため、実のところ両親間葛藤の研究を行うと決めるまでは、意識的に記憶を思い起こすことがありませんでした。また、わたし自身、記憶を思い起こすまでは、自分の過去を「乗り越えた」とすら感じていました。プリーモ＝レーヴィのいうように、どれほど苦痛な体験も記憶は薄れていくうえ、変貌していくのです。そのことは、「思い出しバイアス」という一言で形容できるものではないと思います¹⁰。自分の記憶であれ、他者の記憶であれ、このような記憶の忘却も変貌も引き受ける姿勢のなかで、体験の「記憶」は書かれるべきだと考えます。

次に、「記憶を思い起こす苦痛」について考えてみたいと思います。石原吉郎は、苦痛の記憶を取り戻す過程について、次のように述べています。

精神も私たちのなかで、たしかに回復しつつあった。しかしそれは、肉体の回復のようなよろこばしい過程ではけっしてない。それ自体が自己目的に近い肉体の回復とはちがひ、精神の回復は、なによりもまずその痛みの回復である。それは、コルホーズの女たちの沈黙と涙を、痛みとして受けとめる感受性を、生きているという事実の証しとしてとりもどすことである。¹¹

苦痛そのものより、苦痛の記憶を取りもどして行く過程の方が、はるかに重く苦しいことを知る人は意外にすくない。欠落したものをはっきり承認し、納得する以外には、この過程をのりこえるどのような手段ものこされてはいなかったのである。¹²

さて、わたしは高校生のとき、クラスメートから「なぜ生まれてきたか考えたことがあるか」と尋ねられたことがあります。そのときのわたしは、「そんなことを考えてもしょうがない。もう生きてるんだから。」と、即答したことを覚えています。両親が離婚した直後の高校生のときは、生活苦はあったとしても、あまり精神的苦痛を抱えてはいませんでした。わたしにとって、精神的に最も苦痛であった時期は大学時代です。あまりにも、周囲のひととわたしの日常は異なっていましたし、それゆえにわたしの「価値観」も、周囲とズレていました。今でもズレていると思います。石原吉郎は、シ

¹⁰ 科学的根拠に根差した研究が求められる場合には、過去の出来事や記憶を思い出す際に一定の正確さが必要不可欠になります。本日の発表では、科学的根拠というよりも、個々人が有する「固有な記憶」に焦点を当てています。

¹¹ 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、1997年、92項

¹² 前掲、96項

ベリア抑留から帰国した後の日々について、次のように述べています。

苛酷な現実がほとんど一つの日常となってしまった状態から、もう一つの日常へ一挙に引きもどされたとき、否応なしに直面せざるをえなかった二つの日常の間のはげしい落差は、めまいに近いものであった。そしてこのようなめまいのなかで、かつて問われつづけた自分自身をもう一度問いなおして行く過程は、予想もしなかった孤独な忍耐とかたくなな沈黙を私に強いた。¹³

大学生のときは、わたしの家庭も安定してきて、ようやく先が見える状況になりました。そうすると、わたし自身が育ってきた過去の日常や、わたし自身に目が向いてきます。あまりにも周囲と違うのです。周囲と違うのだから、周囲のひとにかつてのわたしの日常を話しても、理解されることもありません。わたしは、自分だけで自分を考え直すしかありませんでした。そのときのわたしは、この世からいなくなりたいと、生まれたという事実から消していなくなりたいと思っていました。両親が離婚して3年経って、クラスメートから尋ねられた「生まれてきた意味」に苦しむことになったのです。

このように、過去に体験した苦痛は、決して消え去ることはないでしょう。それどころか、苦痛はそのひとそのひとに沿う形で刻み続けられ、ひとりひとり固有の形で保有されるのだと思います。だからこそ、「思い出しバイアス」のように正しい過去の記憶を得ようとして、過去を区別しようとする試みは、研究の手法をもってしても難しいと思われまます。そして、「記憶を思い起こす痛み」と向き合う術を、冷静に「記憶」と対峙する術を、今のわたしは未だ持っていません。

次に、自分を書くのがいやな理由の2つ目である、「記憶を書くことの不可能さ」について話したいと思います。わたしは一度、自分の記憶を少しだけ書いてみたことがあります。書けるところだけを書きました。自分で書いた文章を読んだ第一印象は、「これじゃない」でした。書いた言葉が、わたしが思う「記憶」や「事実」と、びっくりするほど異なるのです。一般的に、「言葉では表せないほどの体験をした」というように、自分が体験した記憶に、言葉が追いつかないということがあります。それは、わたしがした体験は、こんな陳腐なことではない、というような思いです。しかし、「記憶を書くことの不可能さ」は、体験の記憶に言葉が追いつかないだけではありません。それだけでなく、というよりも次の理由の方が、わたしにとって重大なのですが、体験の記憶に言葉をあてがおうとすると言葉が離れていくのです。書こうとする前までは、体験の記憶に即した、自分の内部に確かにあった言葉が、書こうとすれば書こうとするほど、言葉の方から離れていくのです。そのため、言葉が離れた状態で書かれた文章は、わたしの体験を書いたはずですが、「これじゃない」ものになりました。そ

¹³ 前掲

こに、わたしの言葉は見当たらなかったのです。石原吉郎は、詩を書くことについて、次のように述べています。

詩における言葉はいわば沈黙を語るためのことば、沈黙するためのことばであるといってもいいと思います。もっとも語りにくいもの、もっとも耐えがたいものを語ろうとする衝動が、ことばにこのような不幸な機能を課したと考えることができます。¹⁴

石原吉郎とわたしでは、言葉がないことの次元が違うのは、重々承知しています。ただ、自分のなかで書くまいと沈黙してきたことで、自分の内部でのみようやく言葉になっていた体験が、書こうと外部に導かれることで遠ざかっていくのだと思います。書こうとすれば書こうとするほど、言葉が離れることで、わたしは「書くことの不可能さ」を実感することになりました。

このように、自分を書くことは、困難であり不可能であるから「いや」だと思っています。

5. わたしは何をしたいのか：原点と位置

ここまで、タイトルである「インタビューもいやだし、自分を書くのもいや」な理由を、長々と述べてきました。それにより、「いや」である共通点として、書かれたものが「事実とちがう」ということがわかりました。先行研究を読むにしても、インタビューをするにしても、自分を書くにしても、研究を通じて他者や自分の〈体験の記憶〉に、「事実とちがう」言葉をあてがってしまうことが、「いや」なのです。それはつまり、「事実を書けない」ことが、わたしにとって「書くことのくるしみ」であると思われまます。それでは、ここでいう「事実」とは、わたしにとっての「事実」とは、何なのでしょう。そもそも、なぜ「事実」を書くことが重要なのでしょうか。

これらのことを考える手がかりとして、石原吉郎の『望郷と海』に書かれた文章を読んでみたいと思います。石原吉郎は、シベリア抑留の刑期が25年であると聞いたあと、次のように考えたといっています。

帰るか、帰らないかはもはや問題ではなかった。ここにおれがいる。ここにおれがいることを、日に一度、かならず思い出してくれ。おれがここで死んだら、おれが死んだ地点を、はっきりと地図に書きしるしてくれ。地をかきむしるほどの希求に、私はうなされつづけた（七万の日本人が、その地点を確認されぬまま死亡した）。もし忘れ去るなら、かならず思い出させてやる。望郷に代る怨郷の想いは、いわばこのようにして起こった。¹⁵

¹⁴ 前掲、150項

¹⁵ 前掲、126項

わたしは、このような思いを、自分という存在を忘れ去る、もしくはわたしの存在を根こそぎ消し去ろうとする者たちへの怨念を、心のどこかに抱えています。わたしが怨念を抱くひとは、特定の誰かではありません。世間とも言えるような、顔のない誰かに憎しみをもっています。借金生活に追われ、命をかけて戦う母を、誰が助けてくれたでしょうか。母と父が喧嘩し、ぐっと耐え忍んだわたしを、誰が知っているだろうか。見たことを聞いたことをいうわたしの話を誰が聞いたでしょうか。誰にも助けられず、誰にも知られず、誰にも聞かれることのない、過去の「わたし」が確かに「そこにいた」はずなのです。両親の喧嘩は、わたしにとってどうしようもできないことでしたし、わたしは「そこにいる」ことしかできませんでした。だからこそ、「わたしがそこにいた」という「事実」を、誰も消し去らないでほしいのです。そのため、わたしにとっての「事実」とは、わたしがそこにいたことの「証」と考えます。その証として、「事実」を事実のままに書きたいのだと思います。

さらに、「わたしがそこにいた」という言葉を、「そこ」と「わたしがいた」に分解して、考えてみたいと思います。石原吉郎は、次のように述べています。

私の生涯のすべては、その河のほとりで一時間ごとに十分ずつ、猿のようにすりこんでいた私自身の姿に要約される。のちになって私は、その河がアンガラ河の支流であり、タイシェットの北方三十キロの地点であることを知った。原点。私にかんするかぎり、それはついに地理的な一点である。しかし、その原点があることによって、不意に私は存在しているのである。まったく唐突に。私はこの原点から、どんな未来も、結論も引き出すことを私に禁ずる。失語の果てに原点が存在したということ、それがすべてだからだ。¹⁶

このように、〈原点〉があることによって、わたしがいることができるのです。繰り返しになりますが、わたしにとって、両親の喧嘩はどうしようもできないことでした。わたしが両親の喧嘩に関与しようがしまいが、状況は変わりません。記憶は定かではありませんが、両親が離婚する数日前にわたしはソファの上に横たわっていました。両親が家におらず、自分しかいない空間でのみ、まるでナマケモノのように横になっていました。その時のわたしには、過去も未来も母も父も、大好きな犬さえもいませんでした。わたしの精神も肉体もありません。あるのは、赤いソファの上に横たわる「物体」としてのわたししかいませんでした。石原のいう「失語の果て」であったと今は思います。ですが、この時間、物体としてソファを占めるわたしが、そこに不意に存在していたのです。そのような「わたしがいた」そこがわたしの「原点」になります。つまり、「わたしがそこにいた」の「そこ」とは、わたしの〈原点〉であると言えるでしょう。石原吉郎は、失語と原点について次のようにも述べています。

¹⁶ 前掲、69項

これは、私たちのあいだで〈追体験〉とよばれている過程ですが、このばあいの〈追体験〉は、体験そのものをはるかに遠ざかった地点でかろうじて回復したことが、そこまで漂流した曲折をあらためてたどりなおして、ことばの喪失の原点へ里帰りするかたちで行われます。そうしなければ、うしなわれた空間が永久に埋まらないからです。

それは、犯行の現場からたえず遠ざかりながら、そこへ引きかえさざるをえない犯罪者の心理に、似ているといえないことはありません。「原点へかえる」という、いまではもう安易にしか使われなくなったことばは、ほんとうはこうした、おそろしく緊張した、孤独な過程の、忍耐づよい積みかさねを意味しています。¹⁷

一般的に、〈原点〉というとポジティブな意味合いが付随するかと思います。しかし、わたしにとっても、〈原点〉とは言葉を失くすほかになく漂流した「失語の果て」であります。それは同時に、みずからのことばを抑圧するという行為である「沈黙」を選択した過程でもあります。このような〈原点〉へ、わたしはかえりたいと思っています。わたしは両親が喧嘩中、何も言わずにただ見守っていました。それは、この両親の喧嘩がどのような結果を辿ろうとも、わたしは引き受けるしかない、という〈位置〉でもあります。この〈位置〉が、「わたしがいた」ということです。石原吉郎は、〈位置〉を「自分自身がそこにいるよりほかどうしようもないという位置」¹⁸であると述べています。石原にとって〈位置〉は、決して主体的に選択するものではなく、そこにいるよりほかない、ある種の受動性による〈位置〉であると思われれます。また、石原は〈位置〉について次のようにも述べています。

ただ、私にとってかろうじていえることは、私がかつて「ある位置」にいたということは、同時に、他の位置をえらぶことを断念したということではないのか。¹⁹

私は私以外のものであることを断念することによって、まぎれもない私として、今この場に存在している。²⁰

このように、そこにいるよりほかどうしようもなかった〈位置〉は、他の位置を断念することで、わたしという単独の存在になりうるのだと思われれます。そのため、「わたしがいた」〈位置〉や、断念した他の〈位置〉を確認することで、わたしの存在を確認することもできるのだと考えます。

したがって、「そこにわたしがいた」とは、「わたしの原点にわたしがわたしとしていた」、ということであり、わたしはそのことを事実として書きたいのだと思います。

¹⁷ 石原吉郎『石原吉郎詩文集』講談社、2005年、146項

¹⁸ 石原吉郎『石原吉郎セレクション』、岩波書店、166項

¹⁹ 前掲、167項

²⁰ 前掲、170項

そして可能であれば、わたしだけではなく、対者の原点、対者が対者としていた、その「事実」を書いていきたいと思っています。それはつまり、「わたし（対者）としていた原点」へかえる険しい道のりを、断念してきた〈位置〉をも承認し、納得しながら、忍耐強くたどりなおすということです。

6. おわりに

ここまで、わたしにとっての「書くことのくるしみ」を話してきました。いかがだったでしょうか。話を聞いていて「苦」に感じた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今回のフォーラムでは、わたしのことのみを徹底的に話させていただきました。このなかで、わたしの言葉はどこにあると思いますか。インタビューもいや、自分を書くこともいや、何より事実を書けないのがいや。これは、徐々にわたしの内部に迫っていった内容になっています。このようにわたしに近づけば近づくほど、わたしの言葉が徐々に石原吉郎の言葉になっていっていることに気づかれるのでしょうか。はじめに、石原吉郎とプリーモ＝レーヴィの言葉をお借りする、と言いましたが、5章の「わたしは何をしたいのか」では、自分の意見を書いてあるだろう「地」の文においても、石原吉郎の言葉がわたしと離れがたくなっています。このように、「わたし」に近づくほど、わたしの言葉は遠ざかっていくのです。どうしたらよいのでしょうか。これからも、わたしは迷い続けるのだと思います。唯一わかっていることは、これからもわたしは、「そこにわたし（対者）がいた」事実を書けるよう、足掻き続けるのだということです。そして、この事実を書くには、「わたし」と「対者」の両者がいなければならないということです。さいごに、石原吉郎の『事実』と『花であること』という詩を読んで、わたしの話を終えたいと思います。この2つの詩こそ、わたしが実践者として、書きたいと思う「理想」と、実践者としてこうでありたいと願う「姿勢」を表していると思うからです。何より、『花であること』を読んだ院生の仲間からもらった「これはまさしくゆきほさんですね。」という言葉信じ続ける、ひとつの宣言でもあります。

『事実』²¹

そこにあるものは
そこにそうしてあるものだ
見ろ
手がある
足がある
うすらわらいさえしている
見たものは
見たといえ
けたたましく

²¹ 石原吉郎『石原吉郎詩文集』講談社、2005年、17～18項

コップを踏みつぶし
ドアをおしあけては
足ばやに消えていく 無数の
屈辱の背なかのうへへ
ぴったりおかれた
厚い手のひら
どこへ逃げて行くのだ
やつらが ひとりのこらず
消えてなくなっても
そこにある
そこにそうしてある
罰を忘れられた罪人のように
見ろ
足がある
手がある
そうして
うすらわらいまでしている

『花であること』²²

花であることでしか
拮抗できない外部というものが
なければならぬ
花へおしかぶさる重みを
花のかたちのまま
おしかえす
そのとき花であることは
もはや ひとつの宣言である
ひとつの花でしか
ありえぬ日々をこえて
花でしかついにありえぬために
花の周辺は適確にめざめ
花の輪郭は
鋼鉄のようではなければならぬ

(さいとう・ゆきほ)

²² 石原吉郎『石原吉郎セレクション』、岩波書店、169～170項